

恕—他者との共生のために

富山大学人文学部助教 田畑真美

田畑真美

情報技術の躍進的な発達により、現代の我々は他者とのコミュニケーションがかつて無かったほど容易に取れ、またその範囲も地球規模に拡大している。このことは、現代程他者と呼ぶべき存在との「距離」が縮小された時代はないことを物語っている。パソコン通信やインターネット、携帯電話等を使用することで、我々はどんなに遠くにいる人とも自由に意思を通じ合い、交流を深められる。四六時中、自分は決して孤立した存在ではなく、紛れもなく他者と共に生きているのだという実感を味わうことが出来るわけである。

しかし、この他者との「距離」の縮小の裏には、現代人が一様に持つ心の隙間が垣間見られる。そこに潜むのは、他者と繋がっていることを一々確認しなければならない、もしくははしたいという強迫観念にも似た切迫感と、孤独になることへの限らない不安である。本当に自分は他者から受け入れられ

ているのか、その相手と理解し合っているのか。こういった不安の原因は、いささか逆説的ではあるが、他者との正しい「距離」の掴みがたさにあると考えられる。

たとえば、中高校生たちは絶えずポケベルを打ち合い、携帯電話で他愛もない話に興じている。彼らは、ベルや電話を介して相手との繋がりを確認し、束の間の安心を得ようとする。また、一時期爆発的にはやったプリクラは、視覚的な形で自己と他者との繋がりを保証するうつつのアイテムである。友情の証として彼らは何枚もプリクラを撮り、また交換し合う。その数の多さは、自分の交友関係の広さを示す指標となる。専用のノートに貼られたシールを眺めることで、彼らは自分が沢山の他者との関係の中に組み込まれており、決して一人ではないという実感を得て満足するのである。

彼らの求めるのは、声や写真等分かりやすいモノを介して

得られる他者の存在感であり、その他者と繋がる孤独ではない自分というものの実感である。そしてそれは、表面上縮小したかに見える他者との「距離」の近さを再認することでもある。しかし、彼らは本当の意味で他者との「距離」を正しく掴めているわけではない。むしろ、それが掴みにくいために、彼らはその再認を執拗に求めるのである。

このことについて確認するために、もう一つ例を挙げよう。現代の若者に近年、顕著にみられる特徴の一つに、目立つこと、すなわち他者と異なつた行為をすることへの極度の嫌悪感を抱くという点がある。例えば、クラスの話し合い等で自分の意見を主張したりすることは、即苛めの対象となる。昨今はやつたルーズソックスも、履いていないと仲間外れになるという理由で、自分の趣味如何に関わらず履いていた女子高校生もいると聞く。集団の中に埋もれ、その規律や価値観からはみ出ずにいることが、自分を守ることになるのである。他者と同調している限り、集団内に属することを許され、孤立した独りぼっちの自分を認識しなくて済む。こうした他者との関わりは、確かに保身という重要な機能も果たしているが、その質の面では非常に浅薄である。そこでは、一対一の人格同士の真摯なぶつかり合い、したがってより深い相互理解を目指すことは難しいからである。

つまり、以上のことから言えるのは、彼らが他者との繋が

りを切に求めつつも、他者との間にあと一步のところで一線を引き、深く関わり合うことを拒否しているということである。彼らは他者を求めつつも恐れている。なぜ恐れるのか。端的に言えば、真剣に他者と向き合い、他者から踏み込まれて傷つくことが怖いのである。そしてそれは、自己と他者との「距離」が完全に見えていないからであるが、それがわかるにはまず、引いている一步を踏み出さなくてはならず、事は堂々巡りの悪循環となる。

若者の例で主に話を進めてきたが、この悪循環は、まさしく現代に生きる我々が老若男女問わず直面している問題である。容易に他者と繋がりがりうる現代の状況は、この悪循環の自覚をますます困難にさせている。

では、この悪循環を根元から断ち切り、他者と真剣に向き合い、その「距離」を正しく認識しようとするためには、どのような努力が必要であろうか。この問いを解く一つの手掛かりとして、私はここで言い古された概念ではあるが、「恕」という徳目を挙げたい。「恕」は、「己の欲せざるところ、人に施すこと勿れ。」と「論語」にも説明されているように、自分のことのように他者のことを思いやることである。江戸中期の儒学者伊藤仁斎は、この「恕」を自己と対峙する一人格としての他者への積極的な姿勢という点に重点を置き、更に一步進めた形で理解する。それは、他者があくまで自己と異なる

存在であるという厳然たる事実の認識に根ざした理解であり、現代の我々に欠けているのはまさしくこのスタンスなのである。

仁斎は言う。自己と他者とは「体を異にし氣を殊に」(『童子問』上第二章)する存在、すなわち身体も価値観も全く異なった存在である。たとえ親子のような一番身近な間柄であっても、それは同じである。血縁の近さや親しさの度合いは、必ずしも正しい相互理解を保証しない。したがってときには、「親戚知旧の艱苦を見ること、なお秦人越人の肥瘠を視るがごとく、茫乎として憐れむことを知らず」(『語孟字義』忠恕1)というように、親しい者の苦しみすらまるで異国に住む人のそれに対するように無関心に捉えてしまうこともある。仁斎は、自己と他者との避けがたく埋めがたい異質性という距離を前提として、相互の不適切な関わり方が生じうる可能性を説くのである。

しかし、仁斎は、他者との理解の不可能を主張したいのではない。むしろ、仁斎の主張は逆である。確かに他者は紛れもなく他者であり、自己との相違は否定しえない。しかし、この異質性という距離が存在するからこそ、自己と他者は全く切れている状態であるからこそ、かえってその「距離」を結び、埋めようと努力しなくてはならないと、仁斎は考える。「距離」があるということの認識は、かえって他者との結合の

必然性を導き出すのである。「距離」が存在するからには、もちろん、他者との結合はそう容易にはいかない。それは先にも指摘したとおりである。だからこそ、表面的な、一歩引いた形での関わり方ではなおのこと、「距離」を埋めることは困難となる。そこで、仁斎が提示するのは、「体察」という姿勢である。その人は今どんな気持ちでいるのか、なにをしたいのか、「その心をもっておのが心とし、その身をもっておのが身とし」(同)、常に積極的に相手の側へと働きかけようとする真摯な姿勢である。この姿勢は、「恕」が「忠恕」としてよく「忠」と並列させられていることから分かるように、自己を尽くす、つまり一つも欺くことない誠実で純一な気持ちで他者に向かうことを基盤とするものである。真剣に他者に向き合っていけば、他者は単なる切れた、異質な存在ではなくなる。つまり、真の姿が見えてくるのであり、その上で他者との真の関係が成立しうるのである。そしてこの姿勢の果てに生じてくるのは「寛宥」の心である。他者の存在の重さを回避せず、誠心誠意この身に引き受けようとするとき、その存在の自己との相違点や過ち、欠点迄もが両者を隔てる要素ではなくなる。それらは全て受容されるべきものとして立ち現れるのである。

もちろん、これは無条件の他者肯定ではないし、他者の甘えを許容するものでもない。今まで自他の相違を容赦なく知

らしめ、言いようのない孤独感や不安を生じさせていたところのものをそれとして真正面から受けとめること、そうした自己とは異なつた他者のあり方を承認するという、他者存在に對する深い理解を目指すことである。それは、自他の決定的な相違に直面して躊躇するのではなく、逆に、その厳しい事実認識を乗り越えてこそ、成立する姿勢なのである。このような厳しさを孕む真摯な自他の相互理解においては、傷つき傷つけられるといった辛い場面も沢山生じるだろう。それは、ある種当然のことである。重要なのは、ぶつかり合つた痛みに怯まずに、絶えず相手との「距離」を模索していこうとする前向きな姿勢である。多少の過ちを恐れてはならない。幾多の過ちやすれ違ひを受け入れ、乗り越えたところで、他者との間に堅固な橋が架かるのである。

また、ここでもう一つ付け加えておきたいのは、強い自己の足場を固める重要性である。たとえ一時的な慰みとしてであれ他者と繋がっている保証を欲するのは、実は自己の在り処が分かっているからでもある。他者の理解は、堅固な自己理解の基に成り立つものである。他者と真摯に向き合い、何度傷ついても立ち上がれる自己の確かさを実感できるようになることが、「恕」のもうひとつのポイントであろう。つまり、「恕」とは、單なる慈悲や思いやりに加えて、他者と堂々と向き合える一個の人格を持つことでもあるのである。いう

までもなく、この自己は、他者との相互作用のなかで育まれていくべきものである。

仁斎の説く「恕」を手掛かりとして自己と他者の関わり方の問題を見てきたが、いずれにせよ、我々に必要なのは、もう一步他者に対して踏み込もうとする勇氣である。技術や目に見える道具によつて繋がつたつもり、分かり合つたつもりになつて安心を得ても、それはくすぶる不安や孤独感の根本的な解決にはならない。今まで隠蔽し誤魔化していたこと―自分は本当に現前の相手が見えているのか、もしくは見ようとしていたか―について、またそうした他者へと関わりようとする自己のあり方について考え直す必要がある。

もちろん、以上のことは言葉で言うほど容易なことではないが、決して机上の空論で終わつてはならない種類の問題である。人種や国家の相違に関わらず、環境・資源・平和の問題等、地球規模で取り組むべき問題を共有している現代の人類の状況を考えると、異質な存在同士が、より深い相互理解を目指し、同じ地球に住む同志としてよりよい生を営む為に努力していくこと、またその必要性を自覺して生きていくことは、我々の共通課題である。

何も、始めから他者存在として世界全体を想定せよというのではない。まずは、自己と関わる身近な他者―親兄弟や友人、教師。同じ地域に住む人々等―との相互関係を緊密に取

り結ぼうとすることが肝要である。むしろ、この一人一人の身近な他者を自己と同じ熱い血肉を持つ一人格として認め、真摯に関わっていく日々の努力が基盤となり、世界全体のよりよき共生を可能にするのである。「怨」は、この共生の為に我々が基本態度として身につけるべきものであり、また、人間が真に人間としての誇りを持って生きていく為の共通の秩序（道徳）を形成する基盤なのである。

注

本文引用の文献は以下のとおりである。『童子問』（岩波文庫）、『語孟字義』（岩波日本思想大系、『伊藤仁斎・伊藤東涯』所収）